

講義「生活科教育法」の構築

井上 雅夫*・天木 桂子**

(1993年12月8日受理)

Masao INOUE and Keiko AMAKI

An Idea on Teaching Methods for "Seikatu-ka"

本論文は「生活科教育法」の講義構築の理念と講義内容を述べたものである。新教科「生活科」の登場に対応して初めて開講されることになった「生活科教育法」は、2名の家政科教官と1名の理科科教官が担当した。家政科教官には、低学年家庭科としての意味を生活科に持たせたいとの願いがあり、その願いを込めた講義内容が展開された。一方、理科科教官は、従来の低学年理科との関係も考慮しないわけではなかったが、家政科教官の講義内容とのつながりに気をくばりながら、低学年理科とは異なる新しい教科として生活科をとらえる講義を展開した。3名の担当教官の協力でつくりあげた新授業科目は輪講(オムニバス)形式の講義よりはるかによい講義内容になり得たと考えられる。

〔キーワード〕 教科教育, 生活科教育, 大学教育

はじめに

岩手大学教育学部では、生活科に関する授業科目として「生活科概論」と「生活科教育法」(それぞれ半年間2単位)を開講している。正規の講義が開設された時期は、「生活科概論」が平成3年度後期、「生活科教育法」がそれから1年後の平成4年度後期であった。「生活科教育法」は、教材研究に関わる内容をやるということで、社会科・理科・家政科の教官が担当することになった。現在は、前期を社会科と家政科が、後期を理科と家政科が担当している。すなわち「生活科教育法」の講義は理科教官と家政科教官の組み合わせで開始された。講義担当順は次のようであった。長澤由喜子(家政科)2コマ、天木桂子(家政科)2コマ、井上雅夫(理科)9コマ、合計13コマ(1コマは1時間30分)である。各時間のテーマを第1表に示す。各担当者は、これまで主として次のような分野で学部教育に携わってきた。長澤は家庭科教育と住居学、天木は被服管理学、井上は理科教育である。

本論文は、初めての授業科目に多少の戸惑いは感じながらも、担当者が講義をどのように構築していったかを、3人の担当者のうち井上と天木が述べるものである。

* 岩手大学教育学部理科

** 岩手大学教育学部家政科

1 講義内容

第1表 講義のテーマ

第1回 (1992年10月9日)	生活科年間指導計画の構想, わたしの生き立ち
第2回 (10月16日)	基本的生活習慣 (とくに健康安全)
第3回 (10月30日)	わたしのしごと
第4回 (11月6日)	買い物をしよう
第5回 (11月13日)	わたしのかぞく
第6回 (11月20日)	祭り
第7回 (11月27日)	受講学生の質問に答える
第8回 (12月4日)	凧上げ
第9回 (12月11日)	差別
第10回 (12月18日)	基本的生活習慣 (とくに礼儀作法)
第11回 (1993年1月22日)	季節変化への気付き
第12回 (1月29日)	自分自身や自分の生活について
第13回 (2月5日)	教育課程における生活科の位置付け

1 家政科教官担当分

1-1 講義を行うに当たって

現在, 小学校における家庭科は, 5, 6年のみに設定されている。しかし, 家庭科教師としては, 従来より小学校低学年からの家庭科導入の必要性を考慮しており, 日本家庭科教育学会, 教大協家庭科部門などが, あらゆる方面へその設置を訴えてきた。その意味で今回登場した生活科は, われわれとしても, こうした経緯の中で非常に重要な機会ととらえており, 家庭科の全学年設置に向けての足がかりとなることを期待している。ただし, 必ずしも全学年に家庭科という教科を設置するという意味ではなく, 家庭科の内容が学習できる教科があればよいというのが筆者の考えで, 生活科もその一つととらえている。

このような考えを基本としながら, 筆者らは, 家庭科としてどこまで生活科に踏み込めるか, 従来の社会的的内容と理的内容との関連をどうはかるか, 低学年の児童にふさわしい内容は何かを模索することから始めた。

その結果, 生まれた時に最初に出会い, 人をとりまく最も基本的である, そして何より5, 6学年の家庭科の内容であり, 家政学の一分野でもある「家族」に視点を置き, 家庭生活を出発点として講義を始めることにした。そしてさらに, 家庭生活から学校生活, 社会生活への広がり, つながり方を考慮した講義へ発展させて行くことを企図した。

児童の属する家族の形態は児童めいめいについて異なっている。各人についてバラバラな内容を一つの教室で扱うのはかなり難しいこと, また, きわめてプライベートなことであり, 触れられたくないと考えている児童もいるため, 教師としては慎重に扱わなくてはならない部分であることを考慮した教材選択を心がけた。また, 指導にあたっては, 各家

庭の単なる比較であってではなく、良否を問うものでもないことをふまえながら、自分の家庭以外のいろいろな家庭の姿を認識させるとともに、最終的には自分の家庭に戻して考えさせることに留意した。

1-2 第1回 テーマ「生活科年間指導計画の構想、わたしの生い立ち」

第1回は、生活科の年間指導計画を、盛岡市立仁王小学校の構想を例に挙げて紹介した。これによって、2年間で学習する内容の全体像をつかませることをめざした。生活科は、必ずしも1教材ごとに順番に学習していくものではなく、数か月といった長期にわたるものもあり、その間に別の教材を平行して学習する場合がある。また、季節や年中行事との関わりも大きいので、年間を通しての視野（縦の見方）が必要なこと、さらに、学習の場が教室だけでなく、学校全体、さらには近所の公園、駅、郵便局、商店街と広範囲に設定される（横の見方）ことも理解させたかった。

次に、家族や家庭生活の取り扱いの例として、五つの実践指導例を紹介した。

〔事例1〕1学年「家族の音を探そう」盛岡市立仁王小学校

これは、家族が仕事をしている音を探す活動を通し、家でどんな仕事をしているのかを調べるものである。家族がそれぞれ役割を持っていることに気づかせ、自分もその一員として進んで仕事をしようとする意欲を持たせることを目標としている。

〔事例2〕2学年「わたしのアルバムをつくろう」盛岡市立仁王小学校

生まれてから現在までの様子を聞いたり調べたりして、アルバムづくりをする例である。アルバムづくりを通して、誕生から現在までの自分の成長を振り返り、自分が大きく成長したこと、ここまでの成長には家族や周囲の人々の支えがあったことがわかり、感謝の気持ちを持つことをねらいとしている。

〔事例3〕2学年「タイムマシーンにのって出かけよう」船橋市立船橋小学校

事例2と同様に、これまでの自分を振り返り、自分の成長記録（絵本、すごろく、年表、アルバム、カルタなど）を作製する例である。途中、産婦人科へ行って新生児を見る、産ぶ声のテープを聞かせる、赤ちゃんのダミーをさわる機会を設けて、自分の成長に気づき、過去を振り返る手がかりとしている。

〔事例4〕1学年「おおきなて、ちいさなて」大阪教育大学附属小学校

家族の手を絵に表し、家族のことを話す例である。「おおきなて」は祖父母や両親のこと、「ちいさなて」は自分や兄弟姉妹のこと、それぞれの違いや特徴を探すとともに、自分もやがて「おおきなて」になることを自覚させ、大きくなった自分を想像させている。

〔事例5〕1学年「わたしの家」大阪教育大学附属池田小学校

自分や自分のまわりの人（先生、友だち、家族）のめいしをつくってみんなであてっこをし、自分に関わりのある人を認識させることを目的としている。また、かぞくしんぶんをつくってみんなにわたしの家族を紹介したり、同時にともだちの家族の様子を知って、いろいろな家族があることを認識する例である。

1-3 第2回 テーマ「基本的生活習慣（とくに健康安全）」

ここでは、小学校における基本的生活習慣の指導について取り上げた。指導の要点として、①生命の尊重・健康安全に関すること、②規則正しくきまりよい生活に関すること、

③礼儀作法に関することの3点¹⁾を設定し、ここでは①を取り扱った。さらに、健康安全教育として、身体や衣類の清潔、洗面歯みがき、交通およびその他の安全の三つ¹⁾を設定し、以下の二つの指導事例を挙げて具体的指導を行なった。

〔事例1〕2学年「家族をみつめよう」大阪教育大学附属小学校

家族の健康について、①けがや病気、②家族の病気、③健康な生活、④体をきたえよう、⑤清潔なからだの5点から取り上げた例である。具体的実践として、健康によくない生活の例を挙げたり、自分の生活調べを行なって、反省すべき点や変えるべき点を学習させ、規則正しい生活をする事の大切さを理解させるものである。

〔事例2〕1学年「元気なからだ」大阪教育大学附属小学校

①虫歯とはみがき、②からだの名前、③ただしいしせい、④さむさに負けないからだの4点を通してからだのことを知り、考える態度を身につけ、健康管理が自分でできることを目標とした事例である。

また、アメリカの小学校で行われている健康教育²⁾についても取り上げ、日本と比較した。

1-4 第3回 テーマ「わたしのしごと」

「自立への基礎を養う」ことが生活科の究極的ねらいである。自立には、経済的自立、精神的自立などがあるが、家庭科の立場から考えると、生活科で養う自立は「生活的自立」と呼ばれるものと考えている。生活的自立とは、自分が生きるための基本的なことは自分でできることであり、そのための決定も自分でできることである。例えば、朝ひとりで起きられる、着がえができる、部屋の片づけができる、バスや電車に乗れるといった生活能力が身につくこと、また、食べたいもの、食べなければならないものがある、着たい衣服が決められる、似合う服がわかるなどの意志決定能力があることである。もちろん小学校低学年でこうした生活的自立を完成するのは不可能であるが、生活科が、生活能力や意志決定能力の基礎を養うきっかけとなると期待している。

こうした考えをもとに、第3回、第4回の講義は、この「生活的自立」をキーワードとして展開した。

第3回は、生活科の教科書³⁾、および教師用指導書^{4) 5)}から「家族、家庭生活」を取り上げている部分をプリント資料として学生に配布した。内容は、①うちのように発表しよう、②うちでできるしごとをさがそう、である。

①では、わたしのうちのあさのようすを調べて発表させ、自分や家族が朝何をしているのかを認識させる。例えば、起きる、着がえる、顔を洗って歯をみがく、朝食をとる、持ち物をそろえる、といった自分自身に関わること、また、朝食の準備、後かたづけ、ごみを出す、新聞を取るなどの家族に関わることを挙げさせ、自分でやらなければならないこと、自分がやってあげたいことを考えさせる内容である。また、友だちの家の様子を聞くことで、これまで自分でやってこなかったことがわかり、反省するきっかけとなることをねらいとしている（これらのやり方を学習するのではなく、ひとりでやろうという意欲を持たせることにとどまるが）。

②では、家族で楽しく過ごすためにしている仕事にはどんなものがあるかを調べ、家族

がしてくれていること、自分がしていることを発見させるものである。教科書では、例として、食器をならべる、花に水をやる、ペットに餌をやる、電話にでる、くつを洗う、洗濯物を干すなどが挙げられている。発表会を開いて、実際にやって見せ、それを見て自分もできそうだという気持ちを持たせ、家庭生活への積極的参加をうながすきっかけとしている。

1-5 第4回 テーマ「買い物をしよう」

買い物をテーマに、2つの指導事例を提示し、意志決定について考えさせた。

〔事例1〕1学年「かいもののおてつだいをしよう」横浜市内小学校

家の人に頼まれた物を買うために、あらかじめ計画を立て、実際に店に行って買い物をする実践である。1年生ではあくまで頼まれたものの買い物であって、お手伝いの要素が大きい。また、店の人との会話、ふれあいを通じて地域社会との関わりを体験することが目的である。

〔事例2〕2学年「遠足のおやつをかおう」旭川市内小学校

春の遠足に持っていくおやつを買う実践である。買うものを自分で決めること、金額が決まっている点で事例1とは異なっており、児童の自主的活動の占める部分が多い。事前にお店やさんの探検を行い、自分の買い物がどこにあるのか、どこなら安いかを見ながら買う店の決定も行う。限られた金額と自分の欲しいものとの間で葛藤したり、消費税を経験したりすることによって、意志決定能力を養うことを学生に考えさせた。

以上のように「生活的自立」をテーマとして2回の講義を行ってきたが、これらの内容の多くは、「しつけ」と大いに関連する部分であり、従来は家庭内で行われてきたことであった。しかし、今日では、大人にとっても子どもにとっても生活が大きく変化しており、かつては家庭や地域で行われていた遊びや教育が行われなくなり、子どもたちの直接体験や他人とのふれあいも減少している。そのため、学校で指導しなければならない状況になってきており、生活科は、この部分にある意味で補うために設置された教科であるとも考えられよう。

この点に関して、受講学生の意見を聞いた。

学生からの回答はさまざまであったが、最も多かった意見は、「できるなら家庭で教えることが望ましいし、理想であるが、現在は無理だと思う。家庭が家庭の役割を果たせなくなった今、ある程度は学校で指導する必要があると思う」「かつては常識だったこともできない子どもが多くなっている。親と子が接する時間も少なくなっているのだから、学校で取り扱うのも仕方がない」というものであった。学校で取り扱うのは本意であるが仕方がないとする意見であり、従来から指摘されている家庭の教育能力の低下を感じとっていることがわかる。

一方、学校で取り扱うことに肯定的な意見も見られた。「一日の半分は学校で過ごしているわけだから、家庭と学校の関係プレーで進めていくのがよいと思う」「ここまでは家でこの先は学校でと分ける必要はない」「家庭で学ぶよりも、同じ年の子がたくさんいる学校の方が良い結果になると思う」「集団の中で、まわりの人との関わりの中で生活していくことについては学校で取り上げるべきだ」などが代表的意見である。

しかし、身の回りのことが自分でできること、まわりとの調和の中で生活することについては人間としてぜひ身につけなければならない、という意識は、どこで学習するかは別として、すべての学生が強く主張していた。現代の子どもたちは、知的能力の育成に重きがおかれ、知的能力＝人の能力だと見なされるような社会に育っている。しかし、大人になっても生活能力や意志決定能力が十分育成されていない人が多いことも事実であり、これらの状況を考えると、家庭の教育能力の回復や意識改革をうながすことも重要であるが、学校教育の中で指導する体制を整える時期に来ているのだと考え、生活科がこうした自立への足がかりとなることを期待したい。

2 理科教育担当分

井上は、「生活科教育法」の講義内容について次の方針を立てた。

①生活科の内容全般に取り組む。

筆者はこれまで理科教育法（小および中）の講義を担当してきた。しかし、生活科教育法は社会科教官との組み合わせでないので、自然との関わりのみを講義内容とするわけには行かない。すなわち、井上にとっては、勉強を必要とする新しい教科の登場となった。

②家政科教官担当分との関連をはかる。

③聴講している学生から出された質問や提言をできるだけ取り入れる。

これらの点を考慮しながら、具体的テーマを柱にした毎回完結の講義を企画した。そのテーマ選びのベースにしたのは『小学校指導書・生活編』⁹⁾ および『小学校生活指導資料・指導計画の作成と学習指導』¹⁰⁾ である。第5回から第13回までの9コマすべてのテーマは第1表に示す通りであるが、9コマの講義全体の内容は系統性をもっていない。教科の体系は、多数刊行されている書物で学べばいい、講義では、どの書物にも書かれていない提言を学生にする。それが井上の考えである。以下に講義の展開例を示す。

2-1 第5回 テーマ「わたしのかぞく」

井上が担当する最初の講義であった。家政科教官担当の講義とのつながりを考慮しながら、なおかつ具体的な生活科のイメージがわくように、教科調査官中野重人氏のコメントが入ったつぎの放送番組の視聴から始めた。

生活科の授業「わたしのかぞく」（NHK教育、1989年12月26日放送）

放送すべてを筆記記録（プリントで配布）付きで視聴したが、その中から、「家族は登場したものの児童本人が出て来なかった」という授業提供者の反省に対して、中野が「小学校1年生の、僕、私が登場して欲しい」と述べていることに注目してみた。

提供された授業では、ロールプレイングで家族における自己の位置づけができなかったのである。どこに問題があるかを考察する材料として、つぎの放送番組を視聴した。

心のともしび「人間関係をゆたかに」（テレビ岩手、1992年5月31日放送）

これは、ロールプレイングによって「家族の中で自分には何ができるか」を知ろうとする大人の活動であるが、家族の中の自分の役割を知るためのいろいろな方途を探るきっかけになったと思う。また放送番組では、「他人が演じた自分のしぐさや話しぶりから、自分では気付かなかった点（例えば癖）に気付くこともある」事実が示されたが、児童に友人や先生を演じさせる活動の可能性を考えるきっかけにもなったと思う。

2-2 第6回 テーマ「祭り」

実践例をみると、「〇〇祭り」ということばの入った活動が多いことに気付く。そこで言う「祭り」とは、学園祭・文化祭や、日頃市中でよくみかける〇〇フェスティバルのように、感謝の対象があまりはっきりしないお祭り騒ぎ的な「祭り」であろうか。

『小学校指導書・生活編』につぎの文章がある。

我が国は四季の変化に富んでおり、人々は昔から季節と深いかわりをもちながら生活してきた。各地には、季節にちなんだ行事や祭りが多くある。一般的に夏祭りとか秋祭りなどと言われ、その地の人々に親しまれ、定着しているものである。

(中略)

これらの行事や祭りの数や名称は、それぞれの地域によって違い多様であるが、それは地域社会にとって大切な働きをしているのである⁹⁾。

上記の文章にある「祭り」は地域に伝わってきた「祭り」であることが明白である。その点では、後述する放送番組「生活科の授業・いも祭りをしよう」の中で中野重人がコメントするように、「生活科はふるさと学習」である。下記のように、『小学校指導書・生活編』には、地域に伝わってきた「祭り」でない子どもたちが自らつくり出す「祭り」のことも述べているのであるが、「地域にある定着した行事」云々という文を読むと、やはり地域に伝わる「祭り」の方が望ましいとされているように思える。

自分たちの行事を自分たちでつくり出していくようにすることによって、地域の祭や行事に込められた願いや地域の人々の協力の機会や楽しみの様子に気付くことができ、自分たちの行事を意味あるものに盛り上げることができるのである。

自分たちで季節にかかわってつくり出す行事としては、野菜などの収穫祭、花祭り、夏祭り、雪祭りなどが考えられるが、地域にある定着した行事を学校や学年の行事として取り入れてみることも四季の変化や地域の変化に関心を深める一つの工夫である⁹⁾。

本時では、地域に伝えられてきた「祭り」に参加したり、その「祭り」を積極的に取入れようとする場合に生ずる問題を考えてみた。

その「祭り」はどんな「祭り」であろうか。なにに感謝するのか、宗教とのかかわりはどうか。とくに、当該学校が所属する地域全体が盛り上がる祭りであったとしても、特定宗教が関係した祭りであった場合に、学校で取り上げることが適当かどうかは十分な検討が必要であると思う。講義では下記の学校放送番組を視聴し、後述の問題を提起した。

①とびだせたんけんたい「まつりだわっしょい」(NHK教育, 1991年10月3日放送)

②とびだせたんけんたい「わたしたちのおまつり」(NHK教育, 1992年10月12日放送)

③邦楽百選「伝統をつくる・神輿」(NHK総合, 1986年6月27日放送)

④生活科の授業「いも祭りをしよう」(NHK教育, 1989年12月28日放送)

放送番組③によって神輿のつくり方をみると、神輿には鳥居があり、神輿の意味が明らかになる。放送番組①、②および④にも神輿が登場するが、そこには「神」は不在である。

感謝の対象も不明確である。音では「みこし」と称してはいるものの「神輿」ではないのである。宗教行事としての活動ではないから当然という考え方もあるであろうが、それならば「みこし」という言葉を用いる必要もないはずである。仏教系やキリスト教系の小学校の「祭り」活動で「みこし」を用いることはないかとも思うが、それではそれらの小学校ではどのような「祭り」行事を生活科で行うのであろうか。また、感謝の対象を明確に設けるのであろうか。

2-3 第7回 受講学生の質問に答える

受講学生からの質問・意見・要望に対しては、毎回の講義でも随時対応したが、これから6コマの講義をする上で応えておいた方がよいと判断されるものを本時でまとめて取り上げてみた。

質問・意見・要望例を示す。

1. 学校放送番組に関する質問と意見。受講学生が下した評価には「良し」とするものもあったが、「ストーリーがない」「番組の進行役であるお兄さんやお姉さんの役割がわからない」「非常にヤラセっぽい」等の否定的な評価もある。
2. 「長期休暇等においては飼育動物の世話の分担で非常にやっかいたと母が言っていた。当番を決めても子どもが来ないそうである。この辺のやり方について知りたい。」等、飼育栽培に関する要望や質問。
3. 「生活科の評価についてやって欲しい。」等、評価についての要望や質問。

これらの質問・意見・要望に対して、文献の提示や紹介、放送番組の視聴等具体的な資料で応答することを行なった。

文献の提示や紹介の例として、上記1と上記3の対応例を述べる。上記1については、番組制作者の考え¹⁰⁾をプリントとして配布し、多少のコメントを加えることで対応を行なった。また、三木史子¹¹⁾のように積極的に学校放送を活用した事例を紹介した。上記3については、中野重人¹²⁾のように個人の考えを述べたものや評価に焦点を置いた実践例集¹³⁾から学ぶなどさまざまな学習材料があることを紹介した。

放送番組の視聴での応答は、電話での質問に識者が回答する放送番組を活用した。すなわち、下記の放送番組から適宜抽出した。

- ①徹底Q&A「生活科・生活科ってなんだろう」(NHK教育, 1991年3月25日放送)
- ②徹底Q&A「生活科・地域にねざす」(NHK教育, 1991年3月26日放送)
- ③徹底Q&A「生活科・自然とつきあう」(NHK教育, 1991年3月27日放送)
- ④徹底Q&A「生活科・作って遊ぶ」(NHK教育, 1991年3月28日放送)
- ⑤徹底Q&A「生活科・学校が変わる」(NHK教育, 1991年3月29日放送)
- ⑥徹底Q&A「生活科・1年生」(NHK教育, 1992年3月23日放送)
- ⑦徹底Q&A「生活科・2年生」(NHK教育, 1991年3月24日放送)
- ⑧徹底Q&A「生活科・全般」(NHK教育, 1991年3月25日放送)

2-4 第8回 テーマ「風上げ」

生活科がどのような教科であるかを知るために、教科調査官中野重人氏のコメントがある放送番組の視聴から本時の講義を始めた。

生活科の授業「お正月の遊び」(NHK教育, 1989年12月27日放送)

その授業に登場した「凧」に関連する活動について、中野は、「凧上げが1年生で可能かどうかを考えたい。和凧は、つくるのも上げるのもむずかしい。低学年児童の発達レベルに合った活動であるかどうかを研究して欲しい」とコメントした。そのコメントをきっかけにして、低学年における「凧づくり」「凧上げ」を考えてみることにした。

教材研究の材料としたのは、『自然の観察』¹⁴⁾、『国民科国語教科書』¹⁵⁾、米国理科教科書¹⁶⁾であり、いずれも低学年児童の「凧づくり」「凧上げ」を取り扱っている。米国理科教科書で扱われている凧は、もちろん洋凧である。これらの教科書の該当箇所をプリントで配布した。

2-5 第9回 テーマ「差別」

『小学校指導書・生活編』のつぎの文¹⁷⁾を基にして、「差別」について考えることにした。

第5は、生活科の究極的な目標である「自立への基礎を養う」ということである。

(中略)

その一つは、(中略)児童が仲間意識や帰属意識をもち、共に遊び、共に学んで、よりよい生活ができるようになることである。

(中略)

その三つは、学習活動や集団生活において、自分の考えや意見がはっきりと述べられることである。また、自分の意思を人に伝えることができるとともに、人の話を聞くことができることである。自己を表出できるとともに他を受容するということは、社会生活を営む上で欠く事のできない重要なことである。

上記の文の内容を達成するには「差別意識をもたないこと」が前提となると考える。講義の素材としてはつぎの4本の放送番組ビデオテープを用意した。

- ①差別と人間「部落史をどう教えるか」(NHK教育, 1988年12月10日放送)
- ②ワールドTVスペシャル「青い目茶色い目・教室は目の色で分けられた(米国)」
(NHK総合, 1988年4月29日放送)
- ③世界の先生「人は違うのがあたりまえ・ジョーン・ブラハム, オーストラリア」
(NHK教育, 1991年4月19日放送)
- ④シリーズ人権「世界人権宣言を知っていますか」(NHK教育, 1992年3月23日放送)

放送番組②と③についての学生の感想の中に「日本では人種差別がないが」というのがあった。これは誤解であることを、次時の最初につぎの放送番組を視聴するかたちで具体的に指摘した。

筑紫哲也ニュース23「立ち上がったアイヌ民族」(岩手放送, 1992年12月放送)

この放送番組視聴は、別の学生の「ところで、アイヌの人たちは今、平等に接されているのでしょうか」という問いに対する回答でもあった。

2-6 第10回 テーマ「基本的生活習慣（とくに礼儀作法）」

生活科が求める四つの視点のうちの一つは「生活上必要な習慣や技能を身につけること」である¹⁸⁾。これについては、第2回目に家政科教官長澤が「健康安全」に関わる部分を講義の素材としたわけであるが、井上は「礼儀作法」の部分を講義の素材としてみた。

（前略）生活上必要な習慣とは、健康や安全にかかわること、集団生活におけるきまりにかかわること、礼儀作法などにかかわることであり、（後略）¹⁸⁾

ここで言う「礼儀作法」がなにをさすかをまず考えなければならないが、講義においては、文部省『小学校における基本的生活習慣の指導』よりの抜粋をプリントとして配布した。そこに挙げられている礼儀作法の例示は、あいさつ、言葉遣い、食事の作法、身だしなみ、の四つ¹⁹⁾である。この四つは、かつて小学校の修身で教えられていた礼儀の内容とほとんど同じである。講義においては、数十年前の教科書も教材研究の対象にすることができるとして、『小学校修身』の内容²⁰⁾をプリントで配布した。下記の文がそれである。

第五 礼儀

世の中は礼儀で立って行くものです。人に対しては、恭敬の念を失わず、礼儀を正しくしなければなりません。礼儀が正しくないと、人には不快の念を起させ、自分は品位をおとすことになります。細井平洲は、若い時から、礼儀を正しくすることにつとめた人でありましたが、年をとるにつれて、人品はいよいよそなわり、一度平洲にあった者は、時がたっても、其の上品な様子が目にうつっていて忘れられなかったということです。

我が国では、昔から礼儀作法が重んぜられ、外国の人から、日本は礼儀の正しい国だと言われて来ました。時勢はかわっても、礼儀作法の大切なことにかわりはありません。私たちは一そう注意して、大国民としての品位をおとさないように心掛けましょう。

人の前に出る時は、頭髮や手足を清潔にし、着物の着方などにも気をつけて、身なりをととのえなければ失礼になります。

人と食事をする時は、みんなで楽しく飲食するように心掛け、食器の類を荒々しく取扱ったり、さわがしく物音を立てたりしないようにしましょう。又、室の出はいりには、よく落着いて、人の妨にならないようにし、戸障子の開閉なども、静かにしましょう。

汽車・汽船・電車・自動車等に乗った時には、人に迷惑をかけないようにすることはもとより、不行儀なふるまいをしたり、卑しい言葉づかいをしたりしてはなりません。殊に集会の際には、此の心得を忘れてはなりません。又、人の顔かたちや身なりなどをあざ笑ったり、とかく言ったりするのも、かたくつつしむべきことであります。

外国の人に対して、礼儀に気をつけ、親切にすることは、文明国人たる者の心掛くべきことであります。（筆者注 新仮名づかいに直した）

上記のような情報を与えてから、生活科でよくなされる「あいさつ」に関する活動について考えることにした。講義ではつぎの放送番組を視聴した。

①みつめる目「ごあいさつ」（NHK教育、1986年4月10日放送）

②みんなでアタック「あいさつってやめられない」(NHK教育, 1987年5月28日放送)

2-7 第11回 テーマ「季節変化への気付き」

『小学校学習指導要領 生活』の第1学年の内容(3)には、「近所の公園などの公共施設は(中略),身近な自然を観察し季節の変化に気付き,それに合わせて生活することができるようにする。(中略)」²¹⁾とある。

『小学校指導書・生活編』にはつぎのように述べられている²²⁾。

近くの公園などの身近な自然への関心を深め,季節の変化に気付くようにすることを目指している。身近な自然への関心や気付きを促すには,いろいろな学習活動が工夫できよう。例えば,近くの公園などでの秋探し,冬探しというように,何度か同じ場所に行き,そこで自然の変化を見付けることも,自然や季節の変化に関心をもたせることになる。また,児童が自分の遊びや生活とのかかわりの中で季節の変化をとらえるようにすることも大切である。(中略)

要は季節や天候などの変化に対応するための生活の知恵を育てること

上記の文を読む限りでは,自然の方に力点を置いた学習でないことが明白である。すなわち低学年理科とは異なるのであるが,「自然とはこのようなものをさすのだろうか」「これで自然の季節変化を学ぶことになるのだろうか」「校庭で季節変化がわかるのだろうか」等さまざまな疑問が生まれる。

低学年児童にとっての「自然」とはなんであるか,「季節による自然の変化」の学習はどうあるべきか,を考えよう。それが本時の目標であった。

第2次大戦中の低学年理科『自然の観察』で取り組んだ「季節による自然の変化」学習という「自然」は,「野山」であり,「校庭での観察」は「野山」へ発展して行く第1段階であった。お宮・お寺の境内,公園の利用もなされたが,それは「野山」に行けない,やむを得ざる場合の代替え措置であった。

第一課 学校の庭(一時限)

目的

学校の庭を一まわりして,春の自然の中で遊ばせ,新しい環境になれさせると共に,自然から直接に学ぶ第一歩を踏み出させる。

要項

自然の観察は,先ず自然の中で遊ぶことに始る。そうして,校庭は入学当初の児童にとって,最も手近な自然であり,今後も学習を続ける場所であるとともに,野山の自然を学習するときの基礎をつくる処である。そこで,先ず,校庭の自然の中に児童を導いて,遊ばせながらしどろしどろするのである。その中に,だんだん学校になれて気持ちが落ちつき,校庭のものにも親しみの心が湧いて来る。かように親しみが出て来ると,児童は校庭の色々なものごとに対して,盛に疑問を起し,はたらき掛けるようになる。ここに自然から直接に学ぶ第一歩がある。²³⁾

第五課 春の野（一日）

目的

広々とした野山の自然に接しさせ、自然と共に遊ばせながら、野山の春の姿を強く印象づけ、自然を見る眼を養う。

要項

これまで各課を通して、自然に関心を持ち、親しみを感じるように児童を仕向けて来た。しかし、校庭を中心としていたから、自然とはいっても、著しく狭い処に限られていた。そこで、この課では一日を費して、少し離れた野山へつれて出ることとする。野山には、豊かな自然、生き生きとした自然、調和のとれた自然がある。そこには、校庭では見られない新しいものや珍しいものがたくさんにある。たとえ、日常見なれている木や草や虫でも、広々とした野山で見つけたときには、新しい感銘が湧くものである。このような自然に接すれば、自然を見る眼はしらずしらず肥えて来る。ここに、野山の自然に接しさせ、自然と共に遊ばせる一つの意味がある。

また、四季折々に変る自然の姿は、野山に行き始めて鋭く感じることができる。この季節に対する印象を深めておくことは、自然を知る上にも、情操を高める上にも必要なことである。

かようにして、やがてわれらの生を支えている自然をしり、これになつかしみやありがたみを感じるようになって来るのであって、ここに、教室や校庭にばかり閉じこもらせないで、広い野山を学習の場とする大きな意味がある。

観察の要点

野山の有様は季節に応じて変わって行くものであるが、この程度の児童にはまだその関連をはっきりと認めさせることはできない。それで、初めから四季の移り変りの一つとして、春の色々なことをわからせようと思っはならない。ただ、四季折々に直接に経験させて、物に触れての直接の喜びや驚きを感じさせることから始めるのである。こういう経験が積み重なって行けば、学年の進むにつれて、季節に応じて移り変わる自然の有様をはっきりと認め得るようになる。

（後略）

注意

1. 入学後まだ日が浅くて、学校生活になれていない時期であるから、近くに野山がなければ、堤・荒地・公園、お宮・お寺の境内などで、春の情景のよく現れている処を探すがい。

（後略）²⁴⁾

上の引用文から、なぜ野外に出て自然を観察しなければならないかという主張を読み取ることができる。それは、われわれが生活科の理念を考える際に大いに役立つものではないだろうか。

講義では、そのほか、『自然の観察 一』から「第八課 草花とり」²⁵⁾、「第十一課 麦畑と虫とり」²⁶⁾、「第十五課 ばったとり」²⁷⁾、『自然の観察 二』から「第二十課 とり入れ」²⁸⁾、「第二十一課 もみじ」²⁹⁾の抜粋もプリントとして配布し、秋に至るまでの季節変化の追跡がどのように行われたかを示した。

2-8 第12回 テーマ「自分自身や自分の生活について」

本時は、生活科の教科目標の一つ「自分自身や自分の生活について考えさせる」¹⁸⁾を取り上げた。「生活」という言葉がさすものをきちんとさせておきたかったからである。

「生活科は、児童の生活圏を学習の場とする」¹⁹⁾。家族や大人にとっての「生活」圏と区別して考えねばならない。すなわち、「児童を取り巻く社会環境や自然環境を、自らもそれらを構成するものとして一体的にとらえ、また、そこに生活するという立場から、それらに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるようにする」²¹⁾という文頭の「児童を取り巻く環境」も大人の言う意味でとらえてはならないであろう。

教育における「生活」という言葉の意味を考える材料として戦前における「生活画」や「生活綴り方」を取り上げ、次の放送番組を視聴した。

東北アワー特集「昔、村の子は～50年前子ども文集の世界」(NHK総合、1986年7月9日放送)

2-9 第13回 テーマ「教育課程における生活科の位置付け」

本時は、学校教育法施行規則で規定された授業時数(第1学年 102時間、第2学年 105時間)について考えることにした。授業時数を厳格に守るかどうかは、活動が盛り上がって来た場合の対処の問題というだけでなく、生活科を規定の授業時数で対応する教科ととらえるかどうかという生活科の目標にかかわる問題でもある。

ここでは、総合単元学習(総合単元活動あるいは総合学習)の例を取り上げてみた。設定された課題に生活科を含む複数教科が取り組んだ場合と生活科単独で年間指導計画を組む場合の相違点を考えさせたかったからである。第2学年の総合単元活動時数として315時間(生活 3、国語 2、図工 2、道徳 1、学活 1を取り込む)を当てている上越教育大附属小学校²²⁾の総合単元学習例と長野県伊那市伊那小学校の総合学習例の放送番組を視聴した。

①お母さんの勉強室「あたらしい授業・生活科をめぐって③自らすすんで学ぶ子どもたち」(NHK教育、1987年3月4日放送)

②お母さんの勉強室「あたらしい授業・生活科をめぐって②ひろがる生活体験学習」(NHK教育、1987年3月3日放送)

2 講義資料の収集

講義を構築するに当たって筆者らはさまざまな資料を収集した。以下にその内容の一部を紹介する。

1 放送番組

第1章「講義内容」で述べたごとく、多数のテレビ放送番組を活用した。学校放送生活科の「あしたもげんきくん」(1年生)、「とびだせたんけんたい」(2年生)やかつて低学年総合学習のNHK学校放送番組として放送された「こどもの四季」,「みつめる目」,「みんなでアタック」,「とびだせ!こどもたち」も資料として収集したが、学校放送以外の放送番組でも生活科に関わりのあるものは収集した。その中で「生活科」という

言葉が入っているもののみを第2表に掲げるが、生活科全面実施に至るまでの模索や展望を知ることができる。

第2表 「生活科」に関する放送番組

-
1. きょうの焦点「小学校低学年に“生活科”」(1986年7月29日放送)
 2. おかあさんの勉強室「あたらしい授業・生活科をめぐって①教科の垣根をこえて」(NHK教育, 1987年3月3日放送)
 3. おかあさんの勉強室「あたらしい授業・生活科をめぐって②ひろがる生活体験学習」(NHK教育, 1987年3月4日放送)
 4. おかあさんの勉強室「あたらしい授業・生活科をめぐって③自らすすんで学ぶ子どもたち」(NHK教育, 1987年3月5日放送)
 5. 日本列島ただいま6時「生活科ってなに?」(NHK総合, 1988年5月31日放送)
 6. おはようジャーナル「『生活科』ってなんだろう」(NHK総合, 1989年6月27日放送)
-

2 教科書

「生活」教科書は、12社³³⁾の第1学年用・第2学年用教科書をすべて取り揃えた。また教師用指導書も、売り切れで入手できなかった日本書籍株式会社のものを除き、すべて入手して随時活用した。

3 実践記録

限られた講義時間内に活用できたものはほんの数例にすぎない。したがって講義では、できるだけ多くの資料を回覧し、「あなた方が教壇に立つときにはこれらの多数の実践記録を読む必要があること。それにはどこでどのように資料を収集するか」という情報を与えることを行なった。学校公開記録、単行本、雑誌等がこれに相当する。

4 外国教科書

生活科と外国の教科との比較をした報告がいくつもあるが、筆者の一人である井上はつぎのような外国教科書を収集した。

- ① *Versuche (Aufgaben fuer den Sachunterricht in der Grundshule) 1-4* (Hermann Schroedel, Hannover, 1971)
- ② *Erste Studien (Sachunterricht auf der Grundstufe) 1-4* (Hermann Schroedel, Hannover, 1973)
- ③ *CVK-Sachbuch 1-4* (Cornelsen-Velhagen & Klasing, Berlin, 1979)
- ④ *Unter der Lupe (Sachunterricht in der Grundschule) 1-4* (Schroedel, Hannover, 1983)
- ⑤ *Im Blickpunkt (Heimat- und Sachunterricht fuer Baden-Wuerttemberg) 1-4* (Schroedel, Hannover, 1985)

⑥ *Sach- und Machbuch (fuer der Sachunterricht in der Grundschule) 1-4*

(Cornelsen, Frankfurt am Main, 1989)

⑦ *Science through Infant Topics A, B and C* (eds. Prestt, B.) (Longman, Essex, 1986)

⑦は英国（および米国）の教科書であるが、他はすべてドイツ（旧西ドイツの時代）の教科書である。なお、②から⑥までの五つのシリーズならびに⑦については、教師用指導書も購入してある。

3 今後の展望

二つの科の教官が合同で半年間の講義をすることは、長澤・天木・井上のいずれにとっても初めての経験であった。それゆえ、講義開始に至るまで何回かにわたって講義構築の理念を含んだ話し合いをもったが、学生との対応の中で講義内容は変化してゆく可能性があるもので、半年間の講義の構成を教科書的に一貫性をもつものにせず、毎時間テーマを設けて、そのテーマについて具体的な話を展開するスタイルをとろうということになった。そのことによって、担当者が、枠に縛られないかなり自由な発想で講義を構想できると考えたのである。

しかし、長澤と天木は家政科の教官として一貫した考え方をもっていたし、井上も独自の考え方をもっていた。その点では、はじめの4回を一つのまとまり、後の9回をもう一つのまとまりととらえることができるかもしれない。ただ、井上は、家政科教官の講義内容を生かせるように講義を構想する努力をしており、色合いがまったく異なる二つの講義で構成されていたわけではない。このように融合をはかる努力は、少人数で担当したから可能であったと思う。今後担当者（あるいは担当科）が増えるかもしれないが、「生活科教育法」という一つの授業科目でなにを受講学生に伝えるかを考えた場合には、担当者の数はあまり多くないことが必要だと思う。まして、毎時間担当者が違うというスタイルはとらない方がよいと考える。

さて、毎時間一つのテーマについて講義を展開するならば、講義の題材は無限と言ってもよい。二度と同じ講義はあり得ないとも言える。ただ、題材は多くても、その題材についての講義の中身がととのわなければ、講義にならないわけである。前述の第2章で述べた「講義資料の収集」はまさに、中身をとのえる努力を示したものである。現在のところ、どんなテーマにでも対応できるとまでは行かないまでも、半年間15コマ程度の講義を維持できるだけの講義資料はストックされたと考えている。最初は「なにを話そうか」と多少の戸惑いはあったものの、話したいけれど時間が足りないという状況になりつつある。

時間が足りなくて話せなかった例を挙げれば、ドイツの事実科や米国の健康・安全教育等、外国の教育例の話題があるし、低学年理科や低学年社会科の膨大な遺産をどう活用するかについての話題等がある。

平成5年度の後期も、家政科の天木・長澤と理科の井上という、平成4年度後期と同じ担当者による生活科教育法が開講されている。やはり、毎時間テーマを設けるという、前年度と同じスタイルをとっているが、その内容が平成4年度とどのように変わったか、についても後日報告したい。

引用文献

- 1) 文部省『小学校における基本的生活習慣の指導—望ましいしつけの工夫—』(1985年), 6-12頁。
- 2) Richmond, J. B. and E. T. Pounds "Taking care of yourself" in *Health for Life 1* (Scott, Foresman, Illinois, 1987), 124-143.
- 3) 小学校生活科教科書『せいかつかなかよし1ねん』(教育出版, 1992年), 60-67頁。
- 4) 小学校生活科『せいかつかなかよし1年教師用指導書』(教育出版, 1992年), 126-137頁。
- 5) 小学校生活科『せいかつかなかよし学習指導計画(1・2年)』(教育出版, 1992年), 28-29頁。
- 6) 文部省『小学校指導書・生活編』(1989年)。
- 7) 文部省『小学校・生活・指導資料』(1990年)。
- 8) 文部省『小学校指導書・生活編』(1989年), 33頁。
- 9) 同上, 34頁。
- 10) 小島通晴「描き切りたい子供の“素顔”」(『初等理科教育』26巻13号, 1992年), 86-89頁。
- 11) 三木史子「『とびだせたんけんたい』は活動のエッセンス」(『初等理科教育』25巻12号, 1991年), 150-153頁。
- 12) 中野重人「生活科の学習指導と評価」(『初等教育資料』570号, 1991年), 48-59頁。
- 13) 「特集 生活科全単元の授業と評価—2つの地域で同じ内容を展開—」(『初等理科教育』26巻7号, 1992年), 339頁。
- 14) 「第二十三課 はねとたこ」(『自然の観察 四』教師用, 1941年), 56-64頁。
- 15) 「十八 たこあげ」(国民科国語教科書『よみかた 四』, 1941年)。
- 16) "Let us make a kite" in *SC5/13 Change 1 & 2* (Macdonald Educational, London, 1976), pp. 30-33.
- 17) 文部省『小学校指導書・生活編』(1989年), 10-11頁。
- 18) 同上, 7頁。
- 19) 文部省『小学校における基本的生活習慣の指導—望ましいしつけの工夫—』(1985年), 10-12頁。
- 20) 「第五 礼儀」(修身教科書『小学修身書 巻五』, 1938年), 20-23頁。
- 21) 「小学校学習指導要領 第2章 第5節生活 内容 第1学年(3)」, 1989年。
- 22) 文部省『小学校指導書・生活編』(1989年), 24頁。
- 23) 「各説 第一課 学校の庭」(文部省『自然の観察 一』教師用, 1941年), 1-2頁。
- 24) 「各説 第五課 春の野」(同上), 23-26頁。
- 25) 「各説 第八課 草花とり」(同上), 47-54頁。
- 26) 「各説 第十一課 麦畑と虫とり」(同上), 69-82頁。
- 27) 「各説 第十五課 ばったとり」(同上), 99-104頁。
- 28) 「各説 第二十課 とり入れ」(文部省『自然の観察 二』教師用, 1941年), 7-12頁。
- 29) 「各説 第二十一課 もみぢ」(同上), 13-22頁。
- 30) 文部省『小学校指導書・生活編』(1989年), 8頁。
- 31) 同上, 5頁。
- 32) 春日良樹「みんなあつまれ お堀の生きもの」(『初等理科教育』25巻4号, 1991年), 222-229頁。
- 33) 小学校生活科用教科書はつぎの12社から発行されている。大阪図書・学習研究社・学校図書・教育出版・啓林館・現代美術社・信濃教育会出版部・大日本図書・中教出版・東京書籍・日本書籍・光村図書(五十音順)。